

夏目漱石作品の「匂」「香」「臭」をめぐって

— 共有される心象と記憶 —

前 田 友 美

夏目漱石作品の中には「匂」「香」が効果的に使われている作品がいくつかあると考えられる。ルビは「にほひ」「か」「かをり」と様々である。また本論では「臭」もまた嗅覚の一つの表現として捉え、考察を試みる。夏目漱石の作品には視覚、聴覚の点からしても、非常に卓越した描写が効果的に使用されていることは夙に指摘されている。そこで、今回は五感のうち、嗅覚に注目し、論を展開していきたいと考えた。用例を次に挙げる。作品は発表順に考察を試みる。取り上げる作品は『夢十夜』以降のものに限定して行う。『夢十夜』以前にも「香」の描写のある作品は見られるのだが、対象が多すぎるため、今回の論文では、百合の香を特に漱石作品において重要ととらえ、論を展開していくので、『夢十夜』以降の作品に限定して行う。

一

まず『夢十夜』（明治41年7月～8月）である。用例は以下のようになっている。

①すると石の下から斜に自分の方へ向いて青い茎が伸びて来た。見る間に長くなつて丁度自分の胸のあたり迄来て留まつた。と思ふと、すらりと揺ぐ茎の頂に、心持首を傾けてゐた細長い一輪の蕾が、ふつくらと瓣を開いた。眞白な百合が鼻の先で骨に徹^{てほ}える程匂つた。(第一夜)

②懸物が見える。行燈が見える。畳が見える。和尚の薬缶頭があり／＼と見える。鰐口を開いて嘲笑つた声まで聞える。怪しからん坊主だ。どうしてもあの薬缶を首にしなくてはならん。悟つてやる。無だ、無だと舌の根で念じた。無だと云ふのに矢つ張り線香の香^{におほ}がした。何だ線香の癖に。(第二夜)

①の例の「第一夜」の百合の香りが強く漂う場面は、死んでしまつた女が再び「自分」の前に現れた証であると考えられる。後述する『それから』では、代助と三千代をつなぐ香りとしてやはり百合の香りが用いられている。作者は百合の香りに特別な思いを持つていたと考えられるのではないだろうか。②の「線香」の香は、後述する『門』において、山門を潜りながらも悟りを得られずに葛藤する宗助の姿と、「第二夜」の「自分」は重なる部分があると考えられる。「線香」の香の漂う空間で、「自分」は悟りを得られなかつた結果、自刃するのではないかという考え方もできよう。当然のことながら、「線香」は死を連想させる匂いでもあると言へる。

続いて『三四郎』(明治41年9月〜11月)である。用例④⑤に「香水」の例も入れている。

①二人は石橋を渡つた。

团扇はもう翳してゐない。左の手に白い小さな花を持つて、それを嗅ぎながら来る。嗅ぎながら、鼻の下に宛てがつた花を見ながら、歩くので、眼は伏せてゐる。それで三四郎から一間ばかりの所へ来てひよいと留つた。

(中略)

二人の女は三四郎の前を通り過る。若い方が今まで嗅いで居た白い花を三四郎の前へ落して行つた。

(中略)

三四郎は女の落して行つた花を拾つた。さうして嗅いで見た。けれども別段の香におひもなかつた。三四郎はこの花を池の中へ投げ込んだ。(二)

②三四郎には三つの世界が出来た。一つは遠くにある。与次郎の所謂明治十五年以前の香かがする。凡てが平穩である代りに凡てが寝坊氣である。(四)

③「一寸御覽なさい」と美禰子は小さな声で云ふ。三四郎は及び腰になつて、画帖の上へ顔を出した。美禰子の髪で香水の匂におひがする。(四)

④訳もなく鷹揚に構へてゐると、偶然美禰子とよし子が連れ立つて香水を買いに来た。あらと云つて挨拶をした後で、美禰子が、

「先達ては有難う」と礼を述べた。三四郎には此御礼の意味が明らかに解つた。(九)

⑤今度は三四郎の方が香水の相談を受けた。一向分らない。ヘリオトロープと書いてある壺を持つて、好加減に、是はどうですと云ふと、美禰子が、「それに為ませう」とすぐ極めた。三四郎は氣の毒な位であつた。(九)

⑥「蜜柑を剥いて上げませうか」

女は青い葉の間から、果物を取り出した。渴いた人は、香かに逆さかしる甘い露をした、かに飲んだ。

「美味いでせう。美禰子さんの御見舞よ」

「もう沢山」

女は袂から白い手帛を出して手を拭いた。(十二)

⑦女は紙包を懐へ入れた。其手を吾妻コートから出した時、白い手帛を持つてゐた。鼻の所へ宛て、三四郎を見て

ゐる。手帛を嗅ぐ様子でもある。やがて、其手を不意に延ばした。手帛が三四郎の顔の前へ来た。鋭い香がぶんとする。

「ヘリオトロップ」と女が静かに云つた。三四郎は思わず顔を後へ引いた。ヘリオトロップの壇。四丁目の夕暮。迷羊。迷羊。空には高い日が明かに懸る。(十二)

①の用例では、美禰子が三四郎の眼を意識したうえで、別段の香の無い花をさそ芳しい香りであるかのように匂いを嗅いで見せる演技をしている。三四郎は美禰子が嗅いだ花を拾つて匂いを嗅いでいることから、美禰子に惹かれていることがわかる。印象的な出会いの場面であるといえよう。また、「ヘリオトロップ」の香水は『三四郎』において、三四郎と美禰子を繋ぐ道具として用いられていると考えられる。⑤の用例では、三四郎は美禰子に「ヘリオトロップ」の香水を選んでやっている。美禰子は三四郎の選んだ香水をすぐに買うことに決める。⑦の用例の、終局に近い場面では、美禰子が結婚することを知った三四郎と、会堂から出てきた美禰子との別れが描かれている。美禰子が纏う「ヘリオトロップ」は「鋭い香」を放ち、三四郎に「思わず顔を後ろへ引」かせる。三四郎が選んでやった「ヘリオトロップ」をなぜ美禰子が最後に登場する場面につけていたのか、まだ考察の余地はあると思われるが、三四郎と美禰子の出会いから別れまで、匂いと香が作品に効果的に表れていることがわかる。また②の「与次郎のいわゆる明治十五年以前の香」という比喩的な「香」は、他の漱石作品においても用例が見られるので、後に考察したい。続いて『永日小品』（明治42年1月～3月）の用例を次に挙げる。

①寝やうと思つて次の間へ出ると、炬燵の臭がぶんとした。廁の帰りに、火が強過ぎる様だから、気を付けなくては不可ないと妻に注意して、自分の部屋に引取つた。(「泥棒」)

②自分は肚の中で此の水仙の乏しく咲いた模様と、此の女のひすばつた頬の中を流れてゐる、色の褪めた血の滯とを

比較して、遠い仏蘭西で見るべき暖かな夢を想像した。主婦の黒い髪や黒い眼の裏には、幾年の昔に消えた春の匂の空しき歴史があるのだらう。(「下宿」)

③其の時此の三箇月程忘れてゐた、過去の下宿の匂が、狭い廊下の真中で、自分の嗅覚を、稲妻の閃めく如く、刺激した。其の匂のうちには、黒い髪と黒い眼と、クルーゲルの様な顔と、アグニスに似た息子と、息子の影の様なアグニスと、彼等の間に蟠まる秘密を、一度に一斉に含んでゐた。自分は此の匂を嗅いだ時、彼等の情意、動作、言語、顔色を、あざやかに暗い地獄の裏に認めた。自分は二階へ上がつてK君に逢ふに堪へなかつた。(「過去の匂」)

④幾年十月の日が射したのか、何処も彼処も鼠色に枯れてゐる西の端に、一本の薔薇が這ひか、つて、冷たい壁と、暖かい日の間に挟まつた花をいくつか着けた。大きな瓣は卵色に豊かな波を打つて、夢から翻へる様に口を開けた儘、ひそりと所々に静まり返つてゐる。香は薄い日光に吸はれて、二間の空気の裡に消えて行く。(「昔」)

⑤茸の時節である。豊三郎は机の上で今採つた許の茸の香を嗅いだ。さうして、豊、豊といふ母の声を聞いた。其の声が非常に遠くにある。それで手に取る様に明らかに聞える。——母は五年前に死んで仕舞つた。(「声」)

『永日小品』においては特に⑤の用例の茸の香が印象に残る。茸の香は実際の香であり、豊三郎は、その香から、亡くなった母を思い出している。⑤における香は、慕わしさや思い出を想起させるものであると考えられる。一方、用例③の「匂」は、実際に漂う「匂」ではなく、ある光景から読みとれる様子を指している。③から読みとれる「匂」は、過去の出来事と不安な未来を暗示させる効果を生み出していると考えられる。②では「幾年の昔に消えた春の匂」とあり、失つた過去を懐古させるような役割を果たしており、「匂」は用例③のような不安な現実、用例⑤のような懐かしい記憶などを読者に暗示させる役割を果たしていると考えられる。

次に『それから』（明治42年）の用例を挙げる。

①時に厚い切り口が、急に煮染む様に見える、しばらく眺めてゐるうちに、ぼたりと縁に音がした。切口に集つたのは緑色の濃い重い汁であつた。代助は其香を嗅にほひごうと思つて、乱れる葉の中に鼻を突つ込んだ。縁側の滴は其儘にして置いた。(八)

②代助は大きな鉢へ水を張つて、其中に真白な鈴蘭を茎ごと漬けた。群がる細かい花が、濃い模様の縁を隠した。鉢を動かすと、花が零れる。代助はそれを大きな字引の上に載せた。さうして、其傍に枕を置いて仰向けに倒れた。黒い頭が丁度鉢の陰になつて、花から出る香にほひが、好い具合に花に通つた。代助は其香を嗅にほひぎながら仮寝をした。(十)

③代助は時々尋常な下界から法外に痛烈な刺激を受ける。それが劇しくなると、晴天から来る日光の反射にさへ堪え難くなることがあつた。さう云ふ時には、成る可く世間との交渉を希薄にして、朝でも午でも構はず寝る工夫をした。其手段には、極めて淡い、甘味の軽い、花の香かをよく用ひた。臉を閉ぢて、瞳に落ちる光線を謝絶して、静かに鼻の穴丈で呼吸してゐるうちに、枕元の花が、次第に夢の方へ、躁ぐ意識を吹いて行く。是が成功すると、代助の神経が生れ代つた様に落ち付いて、世間との連絡が、前よりは比較的楽に取れる。(十一)

④「いえ、先刻来た時、あの傍迄顔を持つて行つて嗅いて見たの。其時、たつた今其鉢へ水を入れて、桶から移した許だつて、あの方が云つたんですもの。大丈夫だわ。好い香にほひね」(十)

⑤先刻三千代が提げて這入て来た百合の花が、依然として洋卓の上に載つてゐる。甘たるい強い香かが二人の間に立ちつ、あつた。代助は此重苦しい刺激を鼻の先に置くに堪へなかつた。けれども無断で、取り除ける程、三千代に対して思い切つた振舞が出来なかつた。(十一)

⑥「此花は何うしたんです。買て来たんですか」と聞いた。三千代は黙つて首肯した。さうして、「好い香におほでせう」と云つて、自分の鼻を、瓣の傍迄持つて来て、ふんと嗅いで見せた。代助は思はず足を踏ん張つて、身を後の方へ反らした。

「さう傍で嗅いぢや不可ない」

「あら何故」

「何故つて理由もないんだが、不可ない」

代助は少し眉をひそめた。三千代は顔をもとの位地に戻した。(十)

⑦代助は二三の唐物屋を冷かして、入用の品を調べた。其中に、比較的高い香水があつた。(十二)

⑧門野は少なからざる好奇心を以て、代助の皮鞆を眺めてゐたが、

「少し手伝いませうか」と突立つたま、聞いた。代助は、

「なに、訳はない」と断わりながら、一旦詰め込んだ香水の壺を取り出して、封被を剥いで、栓を抜いて、鼻に当て、嗅いで見た。(十二)

⑨代助は先刻栓を抜いた香水を取つて、栞枕の上に一滴垂らした。夫では何だか物足りなかつた。壺を持つたま、立つて室の四隅へ行つて、そこに一、二滴づゝ振りかけた。斯様に打ち興じた後、白地の浴衣に着換へて、新らしい小搔卷の下に安かな手足を横たへた。さうして、薔薇の香かのする眠りに就いた。(十二)

⑩兄は例の如く、色の濃い葉巻の、火の消えたのを、指の股に挟んで、平然として代助の新聞を読んでゐた。代助の顔を見るや否や、

「此室は大変好い香におほがする様だが、御前の頭かい」と聞いた。

「僕の頭の見える前からでせう」と答へて、昨夜の香水の事を話した。兄は落ち付いて、

「は、あ、大分洒落た事をやるな」と云つた。(十二)

⑩代助は長く懸、らなければ、客の帰る迄待たうと思つた。嫂は判然しないから、風呂場へ行つて、水で顔を拭いて来ると云つて立つた。下女が好い香にほひのする菝の粽を、深い皿に入れて持つて来た。代助は粽の尾をぶら下げて、頻りに嗅いで見た。(十四)

⑪代助は手を打つて、門野を呼んだ。門野は鼻を鳴らして現れた。手紙を受取りながら、

「大変好い香にほひですな」と云つた。代助は、

「車を持つて行つて、乗せて来るんだよ」と念を押した。門野は雨の中を乗りつけの帳場迄出て行つた。

代助は、百合の花を眺めながら、部屋を掩う強い香かの中に、残りなく自己を放擲した。彼は此嗅覚の刺激のうち、三千代の過去を分明に認めた。其過去には離すべからざる、わが昔の影が烟の如く這ひ纏はつてゐた。(十四)

⑫やがて、夢から覚めた。此一刻の幸から生ずる永久の苦痛が其時卒然として、代助の頭を冒して来た。彼の唇は色を失つた。彼は黙然として、我と吾手を眺めた。爪の甲の底に流れてゐる血潮が、ぶる／＼震える様に思はれた。彼は立つて百合の花の傍へ行つた。唇が瓣に着く程近く寄つて、強い香かを眼の眩う迄嗅いだ。彼は花から花へ唇を移して、甘い香かに咽せて、失心して室の中に倒れたかつた。(十四)

⑬雨は依然として、長く、密に、物に音を立て、降つた。二人は雨の為に、雨の持ち来す音の為に、世間から切り離された。同じ家に住む門野からも婆さんからも切り離された。二人は孤立のまま、白百合の香かの中に封じ込められた。(十四)

⑭「先刻表へ出て、あの花を買つて来ました」と代助は自分の周囲を顧みた。三千代の眼は代助に随いて室の中を一

回した。その後で三千代は鼻から強く息を吸ひ込んだ。

「兄さんと貴方と清水町にゐた時分の事を思い出さうと思つて、成るべく沢山買つて来ました」と代助がいつた。

「好い香におひですこと」と三千代は翻がへる様に綻びた花卉を眺めてゐたが、夫から眼を放して代助に移した時、ほうと頬を薄赤くした。(十四)

⑮やがて、座敷から、昼間買った百合の花を取つて来て、自分の周囲に蒔き散らした。白い花卉が点々として月の光に冴へた。あるものは、木下闇に仄めいた。代助は何をするともなくその間に曲んでゐた。

寝る時になつて、始めて再び座敷へ上がった。室の中は花の香におひが全く抜けてゐなかつた。(十四)

以上の用例を代助は、普段から、花の香で己の神経を宥めてゐることが③の用例の「その手段には、極めて淡い、甘味の軽い、花の香をよく用いた」という表現からわかる。用例には挙げていないのだが、次のような場面がある。

それから煙草を一本吹かしながら、五寸ばかり布団を摺り出して、畳の上の椿を取つて、引つ繰り返して、鼻の先へ持つて来た。口を口髭と鼻の大部分が全く隠れた。煙りは椿の弁と蕊に絡まつて漂うほど濃く出た。(一一)

代助は普段から花の匂いを嗅ぐという行為を積極的に行つてゐる。それほどに花の香に己の安定を求める代助が、⑥の用例において、三千代との思い出の花である白い百合の香に対して「思わず足を踏ん張つて、身を後の方へ反らした」ほどの反応を見せるのはいささか矛盾であるとも考えられる。多田道太郎氏は次のように指摘されている。

あの百合の香は、代助にとつてのなだめだったのか。それとも、心の底では無意識に愛していた女を、友情という義侠心の発露から友人にくれてやった欺瞞の中で生きていた当時の代助の、感覚的不誠実、つまりは鈍感さのために、通り一辺にいい匂いだと言ひ、自分もそう信じてきたのか。いずれにせよ、百合の花を三千代に活けてやつた当時の代助はもういない。それから、代助は変わつていったのだ。しだいに不安にさいなまれ、百

合の花をかいでも思わず、身を後ろのほうへそらす男になっていた。百合の香は、今は悔恨の思い出の、すぎ去った四年間の「重苦しい刺激」でしかない。

(中略)

しかし、ついに墮ちる決心を代助はする。三千代と逢う次の機会では、代助は進んで百合を買い求め、本当は三千代を愛していたのだと告白するために三千代を待つ。「部屋をおおう強い香の中に残りなく自己を放擲した」。百合の香のなかに「純一無雜」な過去、「自然」のままの「平和な生命」を認めたのである。花を香りは、過去を、自分の「奥」の感覚を喚起するなためであった——代助にとつて、おそらく漱石にとつても。

多田氏の指摘されたように、代助は過去の思い出と向き合い、三千代への愛情を確認すること、そしてこれからの未来と向き合うことを無意識のうちに恐れていたのではないかと考えられる。⑫から以降の用例では、代助が三千代と自然の昔に還るため、たくさんの白い百合を用意して、匂いの立ちこめる部屋で愛を打ち明ける。百合の花の「香」は二人の共通して持っている思い出であり、その「香」に包まれて三千代に愛を告白することは、誠実な気持ち伝えるために、代助にとつて必要な行為であった。『それから』において「香」は、重要な位置を占めていると考えられる。

次に『門』（明治43年3月～6月）の用例を挙げる。

- ① 塵は秋に入つても別に色づく様子もない。たゞ青い草の匂にほひが褪めて、不揃にもちやくする許である。(一)
- ② 位牌には黒い漆で戒名が書いてあつた。位牌の主は戒名を持つてゐた。けれども俗名は両親といへども知らなかつた。宗助は最初それを茶の間の筆筒の上へ乗せて、役所から帰ると絶えず線香を焚いた。其香にほひが六畳に寝てゐる御米の鼻に時々通つた。彼女の官能は当時それ程に鋭くなつてゐたのである。(十三)

③ 彼等は自然が彼等の前にもたらした恐るべき復讐の下に戦きながら跪ついた。同時に此復讐を受けるために得た互の幸福に対して、愛の神に一弁の香こうを焚く事を忘れなかつた。彼らは鞭たれつゝ、死に赴くものであつた。たゞその鞭の先に、凡てを癒やす甘い蜜の着いてゐる事を覺つたのである。(十四)

④ 畳迄熱くなつた座敷の真中へ胡坐を搔いて、下女の買つて来た樟腦を、小さな紙片に取り分けては、医者で呉れる散葉の様な形に畳んだ。宗助は小供の時から、此樟腦の高い香かきりと、汗の出る土用と、焙烙灸と、蒼空を緩く舞う鶯とを連想してゐた。(十四)

⑤ 其内又秋が来た。去年と同じ事情の下に、京都の秋を繰り返す興味に乏しかつた宗助は、安井と御米に誘われて茸狩に行つた時、朗らかな空気のうちにまた新しい香にはひを見出した。(十四)

⑥ 夫から最初のうちは、詰めて坐はるのは難儀だから練香を立て、それで時間を計つて、少し宛休んだら好からうと云ふ様な注意もして呉れた。宗助は練香を持つて、本堂の前を通つて自分の室と極つた六畳に這入つて、ぼんやりして坐つた。(十八)

⑦ 彼は冷たい火鉢の灰の中に細い練香を燻らして、教へられた通り坐蒲団の上に半跏を組んだ。昼のうちは左迄とは思はなかつた室が、日が落ちてから急に寒くなつた。(十八)

⑧ 宗助は怖くなつて、急に日常の我を呼び起して、室の中を眺めた。室は微かな灯で薄暗く照らされてゐた。灰の中に立てた練香は、まだ半分程しか燃えてゐなかつた。宗助は恐るべく時間の長いのに初めて気が付いた。(十八)

⑨ 彼は思ひ切つて又新しい練香を立てた。さうして又略前と同じ過程を繰り返した。最後に、もし考へるのが目的だとすれば、坐つて考へるのも寝て考へるのも同じだらうと分別した。(十八)

⑩ 消化れない堅い団子が胃に滯うつてゐる様な不安な胸を抱いて、わが室へ歸つて来た。さうして又練香を焚いて坐

はり出した。其癖夕方迄は坐り続けられなかつた。(十八)

①「道は近きであり、かえつてこれを遠きに求むという言葉があるが實際です。つい鼻の先にあるのですけれども、どうしても気が付きません」と宜道はさも残念さうであつた。宗助はまた自分の室に退いて線香を立てた。(十八)

③の用例においては、宗助と御米が出会い、友人である安井から御米を結果的に奪うことになつたお互いの愛のことを「愛の神に一弁の香を焚く事」と表現されており、⑤の「新しい香」もまた、宗助の御米に対する好意をしのばせる香と呼べるのではないか。②の用例の宗助夫婦が子を喪つた時の「線香」と、⑥⑦⑧⑨⑩⑪までの用例の宗助が参禅した時に用いられる「線香」が、作品において重要な役割を果たしていることが考えられるのではないか。②の用例は、かつて宗助と御米の間に漸く授かつた三度目の子供を生れる前に亡くしたことがわかる場面である。それまでの二回とも流産、死産を繰返してきた夫婦の間に、三度目のこの機会を失うことは、運命の冷罵とも言えるような、寒々しさを作品に与えている。⑥⑦⑧⑨⑩⑪までは、宗助が参禅する場面が描かれているが、安井の影を恐れる宗助が宗教に救いを求めながらも何度も挫折し、結局、門の前に佇むことしか出来なかつたことに対する、どうすることも出来ない運命を象徴しているように思われる。

続いて、『思ひ出す事など』(明治43年10月～明治44年・4月)について考察する。

①黄昏の雨を防ぐ為に釣台には桐油を掛けた。余は坑の底に寝かされた様な心持で、時々暗い中で眼を開いた。鼻には桐油の臭がした。耳には桐油を撲つ雨の音と、釣台に付添うて来るらしい人の声を微かながらとぎれくに聞えた。けれども眼には何物も映らなかつた。(一一)

②「思ひ出す事など」は平凡で低調な個人の病中に於ける述懐と叙事に過ぎないが、其中には此陳腐ながら払底な趣が、珍らしく大分這入つて来る積であるから、余は早く思ひ出して、早く書いて、さうして今の新しい人々と今

の苦しい人々と共に、此古い香を懐かしみたいと思ふ。(四)

③ 医者は興のない顔付で、是は血だと答へた。けれども余の眼には此黒いものが血とは思へなかつた。すると又吐いた。其時は熊の膽の色が少し紅を含んで、咽喉を出る時なまぐさい臭がぶんと鼻を衝いたので、余は胸を抑えながら自分で血だ血だと云つた。(八)

④ 此下女は伊東の生れで、浜辺か畑中に立つて人を呼ぶやうな大きな声を出す癖のある頗る殺風景な女であつたが、雨に鎖された山の中の宿屋で、斯ういふ昔の物語めいた、嘘か真か分らないことを聞かされたときは、御伽噺でも読んだ子供の時の様な気がして、何となく古めかしい香に包まれた。(十)

⑤ 強ひられた時、余は已むなく細長く反り返つた硝子の管を傾けて、湯とも水とも捌けない液を、舌の上に亘らせやうと試みた。それが流れて咽頭を下る後には、潔よからぬ粘り強い香が妄りに残つた。(十三)

⑥ 余は眠から醒めたといふ自覚さへなかつた。陰から陽に出たとも思はなかつた。微かな羽音、遠きに去る物の響、逃げて行く夢の匂ひ、古い記憶の影、消える印象の名残——凡て人間の神秘を叙述すべき表現を数え尽して漸く髣髴すべき靈妙な境界を通過したとは無論考へなかつた。(十五)

⑦ 余は余の周囲に何事か起りつゝあるかを自覚した。同時に其自覚が窈窕として地の臭を帯びぬ一種特別なものであると云ふ事を知つた。(二十一)

⑧ 余は其色合の長い間に自と寂びたくすみ方に見惚れて、眼を放さずそれを眺めてゐたが、不図裏を返すと、私はこの絵の中にある様な人間に生れたいとか何とか、当時の自分の情調とは似ても似付かぬ事が書いてあつたので、斯んなやにつこい色男は大嫌だ、おれは暖かな秋の色と其色の中から出る自然の香が好きだと答へて呉れと傍のものに頼んだ。(二十四)

⑨山を分けて谷一面の百合を飽く迄眺めやうと心に極めた翌日から床の上に仆れた。想像は其時限りなく咲き続く白い花を基石の様に点々と見た。それを小暗く包まうとする緑の奥には、重い香が沈んで、風に揺られる折々を待つ程に、葉は息苦しく重なり合つた。——此間宿の客が山から取つて来て瓶に挿した一輪の白さと大きさと香かきから推して、余は有るまじき広々とした絵を頭の中に描いた。(三十一)

⑩余は寝ながら幌を打つ雨の音を聞いた。さうして、御者台と幌の間に見える窮屈な空間から、大きな岩や、松や、水の断片を有難く拝した。竹藪の色、柿紅葉、芋の葉、槿垣、熟した稲の香か、凡てを見るたびに、成程今は斯んなもの、有るべき季節であると、生れ返つた様に憶ひ出しては嬉しがつた。(三十二)

⑪鼬の町井さんはやがて紅白の梅を二枝提げて帰つて来た。白い方を蔵沢の竹の絵の前に挿して、紅い方は太い竹筒の中に投げ込んだなり、袋戸の上に置いた。此間人から貰つた支那水仙もくらくと曲つて延びた葉の間から、白い香かをしきりに放つた。(三十三)

『思ひ出す事など』は随筆という性質上、小説とは異なり、作者自身の正直な気持ちを比較的素直に表しているという特徴がある。修善寺の大患から生還し、その時の気持ちをこう述べている。用例⑧の「おれは暖かな秋の色と其色の中から出る自然の香が好きだ」は大きな意味を持つと考えられる。漱石作品において「自然」と「香」は非常に近いものとして描かれているのではないか。その思いが、三十分の死を経験することによって、より顕著になったと考えられるのではないだろうか。(註)

続いて『彼岸過迄』(明治45年1月〜4月)の考察に入る。「香」「匂」の用例は以下のようになっている。用例は注4として、末尾に挙げる。

次に『行人』(大正元年12月〜大正2年11月)の「香」「匂」の用例を次に挙げる。

①お兼さんは薄化粧をして二人のお酌をした。時々は団扇を持つて自分を扇いで呉れた。自分は其風が横顔に当るたびに、お兼さんの白粉の匂におひを微かに感じた。さうして夫が麦酒や山葵の香よりも人間らしい好い匂におひの様に思はれた。(「友達」四)

②自分は此の時偶然兄の顔を見た。さうして彼の神経的に緊張した眼の色と、少し冷笑を洩らしてゐるやうな嫂の唇との対照を比較して、突然彼等の間に此間から蟠まつてゐる妙な關係に気が付いた。その蟠まりの中に、自分も引きずり込まれてゐるといふ、一種厭ふべき空気の匂におひも容赦なく自分の鼻を衝いた。(「帰つてから」(十八))

③自分の單簡の説明が終ると、彼は嬉しくも悲しくもない常の來客に應接する様な態度で「まあ其処へお掛け」と云つた。

彼は黒いモーニングを着て、あまり好い香におひのしない葉巻を燻らしてゐた。

「出るなら出るさ。お前ももう一人前の人間だから」と云つて少時煙ばかり吐いてゐた。夫から「然し己がお前を出したやうに皆なから思はれては迷惑だよ」と続けた。「そんな事はありません。唯自分の都合で出るんですから」と自分は答へた。(「帰つてから」二十六)

④自分の心の何処かには此明るい世界も亦今遣り過した冬と同様に平凡だといふ感じがあつた。けれども呼息をする度に春の匂におひが脈にほほの中に流れ込む快よさを忘れる程自分は老いてゐなかつた。(「塵勞」一)

⑤彼女の室は自慢する程綺麗にはなつてゐなかつたけれども、自分の住み荒した昔に比べると、何処かになまめいた匂におひが漂よつてゐた。(「塵勞」十一)

⑥それには女の首が描であつた。其女は黒い大きな眼を有つてゐた。さうしてその黒い眼の柔かに湿つたぼんやりしさ加減が、夢の様な匂におひを画幅全体に漂はしてゐた。自分は凝とそれを眺めてゐた。(「塵勞」十三)

⑦——凡てが夢のやうであつた。吾々の祖先が残して行つた遠い記念の匂^ほひがした。みんな有難さうな顔をしてそれを観てゐた。(十九)

⑧自分はなまじい遠くから女の匂^ほひを嗅いだ反動として、却てぢぢむさくなつた。事務所の往復に、ざら／＼した頬を撫で、見て、手もなく電車に乗つた貉の様なものだと悲観したりした。(「塵勞」二十一)

⑨兄さんは暑い日盛に、此庭だか畑だか分らない地面の上を下りて、凝と蹲踞んでゐる事があります。時々かんなの花の香^{かほ}を嗅いで見たりします。かんなに香^{かほ}なんかありません。洞んだ月見草の花片を見詰めてゐる事もあります。着いた日杯は左隣の長者の別荘の境に生えてゐる薄の傍へ行つて、長い間立つてゐました。(「塵勞」四十七)

⑩兄さんの話は西洋人の別荘や、ハイカラな楽器とは、全く縁の遠いものでした。何故兄さんが暗い石段の上で、磯の香^{かほ}を嗅ぎながら、突然こんな話をし出したか、それは私には解りません。兄さんの話が済んだ頃はピアノの音ももう聞こえませんでした。(「塵勞」五十)

『行人』の用例において、印象に残るのは、②の「一種厭うべき空気の匂い」という表現である。二郎が、兄一郎と嫂である直の關係に巻き込まれていく予感を表しており、二郎の予感は、本人の意に反して当たることとなる。③において、二郎が家を出て行くことを一郎に告げる場面では「あまり好い香のしない葉巻」という表現があり、兄弟の噛合わない様子を表しているといえる。⑥では、三沢とかつて想い合っていた精神病の娘さんの姿を描いた絵が「夢の様な匂」を放っている。三沢の、未だに断ち切れない精神病の娘さんへの、漂うような想いの欠片を読み取れるような比喩的な表現は「匂」の他にびつたりなものが見当らない。

『心』(大正3年4月〜6月)における「香」と「匂」の用例は以下のようになっている。「線香」の用例も挙げている。

①「また九月に」と先生がいつた。

私は挨拶をして格子の外へ足を踏み出した。玄關と門の間にあるこんもりした木犀の一株が、私の行手を塞ぐやうに、夜陰のうちに枝を張つてゐた。私は二三歩動き出しながら、黒ずんだ葉に被はれてゐる其梢を見て、来るべき秋の花と香を想ひ浮べた。私は先生の宅と此木犀とを、以前から心のうちで、離す事の出来ないものやうに、一所に記憶してゐた。私が偶然其樹の前に立つて、再びこの宅の玄關を跨ぐべき次の秋に思ひを馳せた時、今迄格子の間から射してゐた玄關の電燈がふつと消えた。(上 三十五)

②私は再び其所で故郷の匂を嗅ぎました。其匂は私に取つて依然として懐かしいものでありました。(下 六)

③然し此自分を育て上たと同じ様な匂の中で、私は又突然結婚問題を伯父から鼻の先へ突き付けられました。(下 六)

④貴方にも覚えがあるでせう、生れた所は空気の色が違ひます、土地の匂も格別です、父や母の記憶も濃かに漂よつてゐます。(下 七)

⑤さうして私の頭の中へ今迄想像も及ばなかつた異性の匂が新しく入つて来ました。私はそれから床の正面に活けてある花が厭でなくなりました。同じ床に立て懸けてある琴も邪魔にならなくなりました。(下 十一)

⑥私が帰つた時は、Kの枕元にもう線香が立てられてゐました。室へ這入るとすぐ仏臭い煙で鼻を撲られた私は、其煙の中に坐つてゐる女二人を認めました。私は御嬢さんの顔を見たのは、昨夜来此時が始めてでした。御嬢さんは泣いてゐました。奥さんも眼を赤くしてゐました。事件が起つてからそれ迄泣く事を忘れてゐた私は、其時漸く悲しい気分には誘はれる事が出来たのです。私の胸はその悲しさのために、何の位寛ろいだか知れませぬ。苦痛と恐怖でぐいと握り締められた私の心に、一滴の潤を与へてくれたものは其時の悲しさでした。

私は黙つて二人の傍に坐つてみました。奥さんは私にも線香を上げてやれと云ひます。私は線香を上げて又黙つて坐つてゐました。(下 五十)

⑦私は妻の望み通り二人連れ立つて雑司ヶ谷へ行きました。私は新しいKの墓へ水をかけて洗つて遣りました。妻は其前へ線香と花を立てました。二人は頭を下げて、合掌しました。妻は定めて私と一所になつた顛末を述べてKに喜んで貰ふ積でしたらう。私は腹の中で、ただ自分が悪かつたと繰返す丈でした。(下 五十一)

①の用例では、「私」が先生と最後の別れとは知らず別れる時に、再会する時に咲いているであろう木犀の花と匂いを想像する場面が描かれている。「私」は以前から先生の宅と木犀の花と香に強い結びつきを感じていたことがわかる。^(注6)次に会う時にも、先生と奥さんに会えると信じて、木犀の「香」を想像する。しかし「電燈がふつと消えた」ように、先生の命も失われることとなる。⑥では線香の煙によつて、改めてKの死を実感し、悲しむお嬢さんと奥さんを眼にして、自分がKを追ひ詰めたと感じていた先生は漸く悲しさに誘われている。⑦も同様に、奥さんと供に墓参りに来て、Kの墓の前に供えられた線香と花は、Kへの罪悪感を募らせるものとなつていゝのではないだろうか。『心』では①の用例の木犀の花と香が、「私」の先生宅へのイメージと強く結びついていることが考えられる。②③④の用例は、先生が叔父に裏切られるまでは自分の故郷に対して温かいイメージを持つていたということを表現する。「懐かし」と結びついた「匂」であると考えられる。遺書を書いている現在でも、先生が故郷で両親と過ごした過去の時間を大事に思つていゝという事実を窺わせる。⑤の御嬢さんへの恋愛感情の発露を表わしたと考えられる。「匂」もまた、突然に先生の中に飛び込んできた華やかなイメージを表現するものであると考えられる。

続いて『硝子戸の中』(大正4年1月〜2月)の用例を見ていく。

①然し私には移す前一度判然とそれを読んだ記憶があつた。さうして其記憶が文字として頭に残らないで、変な感情

としていまだに胸の中を往来してゐた。其所には寺と仏と無常の匂が漂つてゐた。(五)

② 其位不便な所でも火事の虞はあつたものと見えて、矢張町の曲り角に高い梯子が立つてゐた。さうして其上に古い半鐘も型の如く釣るしてあつた。私は斯うした有の儘の昔をよく思い出す。其半鐘のすぐ下にあつた小さな膳飯屋もおのづと眼先に浮かんで来る。縄暖簾の隙間からあたたかさうな煮メの香が煙と共に往来へ流れ出して、それが夕暮の靄に融け込んで行く趣なども忘れる事が出来ない。私が子規のまだ生きてゐるうちに、「半鐘を並んで高き冬木哉」といふ句を作つたのは、実は此半鐘の記念のためであつた。(二十)

③ 母が父の所へ嫁に来る迄御殿奉公をしてゐたといふ話も臆気に覚えてゐるが、何処の大名の屋敷へ上つて、何の位長く勤めてゐたものか、御殿奉公の性質さへ能く弁へない今の私には、ただ淡い薫を残して消えた香のやうなもので、殆んど取り留めやうのない事実である。(三十七)

『硝子戸の中』において、「匂」と「香」は作者の思い出を象るものである。懐かしく慕わしい思い出とともに、その時の「匂」と「香」が同時に感じられるということは、誰でも経験のあることであると思われる。子規や母の思い出を、暖かい気持ちで回想している。作者は、嗅覚に非常に鋭敏であつたのではないだろうか。一種の特別な感慨を「匂」と「香」に込めて表現しているのではないだろうか。

漱石作品の『夢十夜』『三四郎』『永日小品』『それから』『門』『思ひ出す事など』『彼岸過迄』『行人』『心』『硝子戸の中』の用例を見てきたが、実際の「香」や「匂」が作品で効果的に使われているのは、『三四郎』と『それから』であると考えられる。「香」や「匂」が登場人物をつないでいると考えられるのは、『三四郎』の「ヘリオトロープ」と『それから』の「百合」、そして『心』の「木犀」であると言へるのではないだろうか。『心』における木犀の「香」が「私」の先生との別れの記憶と結びついていることは、意識的に書かれたと考えることは可能ではないだろうか。

実際の「香」「匂」でなく、比喩表現として使われるものは『三四郎』以下の作品に見られるが、この比喩的な使われ方も、漱石独特の意思が読み取れると考えられる。

続いて「臭」の考察に這入る。

「臭」は『それから』に次のように書かれている。

①代助は斯んな話を聞く度に勇ましいと云ふ気持ちよりもまづ怖い方が先に立つ。度胸を買つてやる前に腥ぐさい臭にほひが鼻柱へ抜ける様に応える。(四)

②「さうして肉の臭にほひひがしやしないか」(一六)

「臭」は、「腥ぐさい」と、「肉」に付随したにおいであることが考えられる。代助にとつて「香」は自己を放擲するための道具であったが、「臭」はむしろ代助にとつて回避すべきものの比喩として使われている。

「臭」は『門』においては次の場面に表れている。

宗助はこんな新しい刺戟の下に、しばらくは欲求の満足を得た。けれどもひととおり古い都の臭にほひを嗅いで歩くうちに、すべてがやがて、平板に見えて来た。その時彼は美しく山の色と清い水の色が、最初ほど鮮明な影を自分の頭に宿さないので物足らず思い始めた。(十四)

「古い都の臭」は、宗助に物足りなさを感じさせる要因となつていくことがわかる。

続いて『心』の「臭」の考察に入る。用例は以下のようになつている。⑤は「香」の用例②と重複するが、ここでは「臭」の用例として再び挙げている。

①其上私は国へ帰るたびに、父にも母にも解らない変な所を東京から持つて帰つた。昔でいふと、儒者の家へ切支丹の臭にほひを持ち込むやうに、私の持つて帰るものは父とも母とも調和しなかつた。(上 二二三)

②兄は私が土の臭を嗅いで朽ちて行つても惜しくないやうに見てゐた。(中 十五)

③けれども御嬢さんを見る私の眼や、御嬢さんを考へる私の心は、全く肉の臭を帯びてゐませんでした。(下 十四)

④彼の今迄居た所は北向の湿っぽい臭のする汚ない室でした。(下 二十三)

⑤私が帰つた時は、Kの枕元にもう線香が立てられてゐました。室へ這入るとすぐ仏臭い煙で鼻を撲たれた私は、其煙の中に坐つてゐる女二人を認めました。(下 五十)

『心』では②の例において、『それから』と同じく「肉の臭」という使われ方がしている。⑤の例は「臭」という用例で、「にはひ」という読みではないが、挙げてゐる。線香を上げてKの死を悲しんでいる奥さんと御嬢さんを見て、漸く先生は悲しさを感じる事ができた。Kの死を実感させる「臭」であつたと考えられる。

『道草』(大正4年6月〜9月)においては「臭」が特に印象的に使われていると考えられる。用例を次に挙げていく。

①彼の身体には新らしく後に見捨てた遠い国の臭がまだ付着してゐた。彼はそれを忌んだ。一日も早く其臭を振り落さなければならぬと思つた。さうして其臭のうちに潜んでゐる彼の誇りと満足には却つて気が付かなかつた。(一)

②其所には往來の片側に幅の広い大きな堀が一丁も続いてゐた。水の交らない其堀の中は腐つた泥で不快に濁つてゐた。所々に蒼い色が湧いて厭な臭さへ彼の鼻を襲つた。彼はその汚らしい一廓を——様の御屋敷といふ名で覚えてゐた。(八)

③昔しこの世界に人となつた彼は、その後自然の力でこの世界から独り抜け出してしまつた。さうして抜け出したまま永く東京の地を踏まなかつた。彼は今再びその中へ後戻りをして、久し振に過去の臭を嗅いだ。それは彼に取つ

て、三分の一の懐かしさと、三分の二の厭らしさとを齎す混合物であつた。(二十九)

④實際細君は此言葉通りの女であつた。健三も其意見には賛成であつた。けれども彼の推察は月の暈のやうに細君の言外迄滲み出した。学問ばかりに屈託してゐる自分を、彼女が斯ういふ言葉で余所ながら非難するのだと云ふ臭^{におひ}が何処やらでした。(七十七)

『道草』において「香」が描かれているのは、次の場面だけである。

①比田と兄が揃つて健三の宅を訪問したのは月の半ば頃であつた。松飾の取り払われた往来にはまだどことなく新年の香^{におひ}がした。(百二)

「臭」と「香」には大きな相違点がある。「臭」とは健三に染み付いた「遠い国」や「過去」を呼び覚ます「臭」であり、「香」のように、決して慕わしいものではないと考えられる。「香」よりもより現実的な、臭みとも云える、生の人間から発しているにおいなのではないだろうか。晩年の作品に向かうにつれて、「臭」の描写は増えていつてゐる。『道草』において自分に染み付いた生の記憶のにおいを、作者は「臭」と表わしている。未完の『明暗』(大正5年5月〜12月)においても「臭」の表現は多くみられる。このことから、漱石作品において自然の「香」が使われていると考えられるのは、『心』が最後となることが分かる。『心』への筆者の思い入れの強さが窺えるのではないだろうか。

三

「香」「匂」「臭」には共通して「にほひ」というルビが一番多く振られている。しかし作者がそこに込めたイメー

ジはそれぞれに大きく異なっていると考えられる。『心』では自然の「香」の用例は「私」と先生との最後の別れの時の木犀の「香」だけである。しかも「私」は来るべき秋の「香」を想像しているのであって、先生の、あるいは先生夫婦の死が控えていることによって、その「香」は永遠に断続することとなる。^(注7)『思ひ出す事など』を經た『心』において、この場面における「香」は、先生と「私」の絆が慕わしさを込めて表現されていると考えられる。『思ひ出す事など』において「おれは暖かな秋の色と其色の中から出る自然の香が好きだ」(二十四)と書いた作者が求めた自然な「香」であったからこそ、先生と「私」の信頼の絆は強く結ばれたといえるのではないだろうか。『それから』における百合の香と同様に、自然の香によって登場人物の絆をあらわされているということが考えられるのである。^(注8)『匂』や『香』は漱石作品において、実際の感覚だけでなく、『永日小品』における「過去の匂ひ」や、『行人』における「夢の様な匂」(『塵勞』十三)など、雰囲気や伝えるための比喩的な使用法もされる。しかしその用法も、嗅覚という、独特で繊細な感覚で表現していることに、独自性が窺える。『匂』は過去の記憶と結びつき、誰かへの懐かしさと直結している素直な感覚である。

『心』以後の『道草』においては、「臭」が数多く登場する。それは「振り落さなければならぬ」(一)と感じるほどの、過去の記憶に付随する「臭」である。作者が自分の過去に向き合った時に、その「臭」が発せられるのである。「香」「匂」から「臭」への移行には、作者の作品に対する無意識な変化が如実に示されているのではないだろうか。作者は嗅覚に対して非常に率直に、細やかな神経を注いで、作品を彩っていったのではないかと考えられるのである。

注

注1 三四郎と美禰子はヘリオトロップの香によって、思い出を共有していると考えられるが、その香は「鋭い」(十二)と表現され、選んでやった三四郎はその時「好加減」(九)であったことも分かる。三四郎と美禰子は自然でなく、人工の香によって繋がれていたということが分かる。ヘリオトロップは紫色の花で、バナラ香と呼ばれる香りを持つとあり、もし香水の瓶の色が紫であったなら、香水のことが「一向分らない」三四郎が色で選んだとも考えられるのではないだろうか。なお、ヘリオトロップは『趣味の遺伝』『虞美人草』にも登場する。

すると女も俯いたまま歩を移して石段の下で逃げるように余の袖の傍を擦りぬける。ヘリオトロップらしい香りがふんとする。香が高いので、小春日に照りつけられた裕羽織の背中からしみ込んだような気がした。女が通り過ぎたあとは、やっと安心して何だか我に帰った風に落ちついたので、元来何者だろうとまた振り向いて見る。(『趣味の遺伝』)

世界は色の世界である。只此色を味へば世界を味はつたものである。世界の色は自己の成功につれて鮮やかに眼に映る。鮮やかなる事錦を欺くに至つて生きて甲斐ある命は貴とい。小野さんの手巾には時々ヘリオトロップの香がする。(『虞美人草』四)

漱石作品における香水の中で、たびたびヘリオトロップが用いられている理由は、未だよく判らないが、当時の流行という理由以外にも、作者の思い入れが特別に強い香水であるということが考えられるか。

注2 多田道太郎「香りの奥にひそむもの 夏目漱石」(多田道太郎著『多田道太郎著作集6ことばの作法』筑摩書房 平6・9 272頁〜273頁)

注3 「自然の香」を作者自身が好んだということが、作品における「香」と結びつけて考えることはいささか性急のようにも考えられるが、『心』以降において、「木犀」のように自然の植物の香が作品の中で描かれなくなることから、『心』における「木犀」の香は、漱石作品において重要な意味を持つものと考えられるのではないだろうか。

注4 「彼岸過迄」の用例は以下のようになっている。

①夫から鉄無地の羽織でも着ながら、歌舞伎を当世に崩して往来へ流した匂にほのする町内を恍惚と歩きたかつた。(『停留所』五)

②其上此女の態度には何処か大人びた落付があつた。彼は其落付を品性と教育からのみ来た所得とは見做し得なかつた。家

庭以外の空気に触れたため、初々しい羞恥が、手帛に振り懸けた香水の香の様に自然と抜けて仕舞つたのではなからうかと疑ぐつた。(「停留所」二十九)

③二人の行先に就いては、是といふ明らかな希望も予期も無かつたが、少しは紫が、った空氣の匂にほひふ路の中に引き入れられるかも知れない位の感じが暗に働らいて是迄後を跟けて来た敬太郎には、馬鈴薯や牛肉を揚げる油の臭におひが、台所からぶんぶん往來へ溢れる西洋料理屋は余りに平凡らしく見えた。(「停留所」三十一)

④男は香の高い葉巻を銜えて、行く／＼夜の中へ微かな色を立てる煙を吐いた。それが風の具合で後から従がふ敬太郎の鼻を時々快ろよく侵した。彼は其香かほひを嗅かほぎ／＼鈍い足並を我慢して実直にその跡を踏んだ。(「停留所」三十五)

⑤其時分の彼の頭には、停留所の経験が既に新しい匂におひひを失い掛けてゐた。彼は時々須永からその話を持ち出されては苦笑するに過ぎなかつた。(「雨の降る日」一)

⑥松本には十三になる女を頭に、男、女、男と互違に順序よく四人の子が揃つてゐた。是等は皆二つ違ひに生れて、何れも世間並に成長しつゝあつた。家庭に華やかな匂におひを着ける此生き／＼した裝飾物の外に、松本夫婦は取つて二つになる宵子を、指環に嵌めた真珠の様に大事に抱いて離さなかつた。彼女は真珠の様に透明な青白い皮膚と、漆の様に濃い大きな眼を有つて、前の年の雛の節句の前の宵に松本夫婦の手に落ちたのである。(「雨の降る日」二)

⑦やがて白木の机の上に、櫛と線香立と白団子が並べられて、蠟燭の灯が弱い光を放つた時、三人は始めて眠りから覚めぬい宵子と自分たちが遠く離れて仕舞つたといふ心細い感じに打たれた。彼らは代る／＼線香を上げた。其煙の香かほが、二時間前とは全く違ふ世界に誘なひ込まれた彼等の鼻を断えず刺激した。外の子供は平生の通り早く寝かされた後に、咲子といふ十三になる長女文が起きて線香の側を離れなかつた。(「雨の降る日」五)

⑧敬太郎は須永の門前で後姿の女を見て以来、此二人を結び付ける縁の糸を常に想像した。其糸には一種夢の様な匂におひがあるので、二人を眼の前に、須永とし又千代子として眺める時には、却つて何処かへ消えて仕舞ふ事が多かつた。(「須永の話」一)

⑨僕は新しい匂におひ(にはほひ)のする蚊帳を座敷一杯に釣つて、軒に鳴る風鈴の音を楽しんで寝た。(「須永の話」二十六)。
用例③の「紫が、った空氣の匂におひう迷路の中」も用例⑧の「一種夢の様な匂におひ」も敬太郎から千代子や須永を見た、比喩的な表現としての「匂」だが、『彼岸過迄』における秘密を、文字通り匂におひわせるといふ点においては「匂」という言葉が大きな役

割を果たしていると考えられる。

注5

「明暗」における「臭」の用例のうちでもっとも印象的に使われている場面を次に挙げる。
彼女は人差指を自分の鼻の先へ持つて行つた。

「旦那様の是にはとても敵いません。奥さまのお部屋をちゃんとお臭で嗅ぎ分ける方なんですから」

「部屋所じやないよ。お前の年齢から原籍から、生れ故郷から、何から何迄中てるんだよ。此鼻一つあれば」

「へえ恐ろしいもんで御座いますね。——何うも敵わない、旦那様に会つちや」(一八四)

この場面における「臭」は津田の俗物的な側面を表わす表現ではないかと考えられる。

続いて「明暗」における「匂」の用例を次に挙げる。

①又は自衛的に慢ぶる神経の光を放つかの如くにも見えた。最後に、「思慮に充ちた不安」でも形容して然るべき一種の匂も帯びてゐた。吉川の細君は津田に会ふたんびに、一度か二度屹度彼を其処迄追ひ込んだ。(十一)

②四方を見廻したお延は従妹と共に暮した処女時代の匂を至る所に嗅いだ。甘い空想に充ちた其匂が津田といふ対象を得て遂に実現された時、忽然鮮やかに変化した自己の感情の前に并舞したのは彼女であつた。(七十)

③其時夏帽を買ひに立寄つた店から津田が貰つた此見本には、真赤に咲いた日比谷公園の躑躅だの、突当りに霞が関の見える大通りの片側に、薄暗い影をこんもり漂よはせてある高い柳などが、離れにくい過去の匂のやうに連想としてつき纏はつていた。お延はそれを開いた儘、しばらく凝と考へ込んだ。(八十九)

④彼の弱点はもう一步先へ乗り越す事を忘れなかつた。彼のお延に匂はせた自分は、今より大変楽な身分にある若旦那であつた。必要な場合には、幾何でも父から補助を仰ぐ事ができた。たとひ仰がないでも、月々の支出に困る憂は決してなかつた。(百十三)

⑤斯ういふ心得に方遣筆のある筈はないと初手から極めて掛つて吉川夫人に対してゐる津田が、たとひ遠廻しにでもお延を非難する相手の匂ひを嗅ぎ出した以上、おやと思ふのは当然であつた。彼は夫人に氣に入るやうに自分の立場を改める前に、先ず確かめる必要があつた。(百三十四)

⑥彼女の心は堀の門を出た折から既に重かつた。彼女は無闇にお秀を突ツ付いて、却つて遣り損なつた不快を胸に包んでゐた。そこには大事を明らさまに握る事が出来ずに、裏からわざと匂はせられた羽痒ゆさがあつた。なまじいそれを嗅ぎ付けた

不安の色も、前よりは一層濃く染め付けられた丈であつた。(百四十三)

『明暗』における「匂」は②におけるような比喩的な「匂」が多く描かれている。お延の知らない津田の過去が匂わせられるといったような使い方がされており、真相へ迫るお延の心情があいまって表現されていると考えられる。

注6 藤井淑禎氏は木犀の香について次のように述べられている。

私が先生宅とこの木犀とを切つても切り離せないもののように以前から思っていたのは、やはりその芳香の強さと無関係ではなく、また最初に先生宅を訪れ、暮參に同行したりしたのも秋であつたから、この両者が分ちがたく結びつくことになつたのだろう。このように、五感の働き(この場合は嗅覚)によつて過去に体験したモノなりコトなりが連想されてくるメカニズムについては、この時期、心理学のジャンルにおける解明がめざましかった。私の場合も、この香りをかぐと先生宅を思い起こす、というかたちで記憶が成立していたということらしい。(藤井淑禎注釈『漱石文学全

注釈12』若草書房 平12・4 124頁)

藤井氏が述べられているように、木犀の香は秋という季節を思い起こさせるものとして、また先生と私が雑司ヶ谷で暮參した時の季節もまた秋であつたことから、私の記憶と強く結びついている香であることが考えられる。

注7 「私」が何年も前から先生の家の木犀を知っており、その香に親しんでいたことが、この表現から読み取れる。木犀は「私」の先生に対するイメージと重なっていき、花が咲く前に先生が自殺してしまうことで、いっそう悲劇的な場面であることが読者に伝わる。

注8 未だ研究の余地はあるが、漱石作品において、「自然」と「香」が意識下で、等価値として用いられているのではないかという可能性を指摘しておきたい。